

第一朗読 (1マカバイ2章15―30節)

15 時に、背教を強いる王の役人たちが、異教のいけにえを献げさせるためにモデインの町にやつて来た。16 多くのイスラエル人が彼らを迎えるに出、マタティアとその息子たちも集められた。17 そこで王の役人たちは、マタティアに言った。「あなたはこの町では有力な指導者であり、御子息や御兄弟の信望もあつい。18 率先して王の命令を果たしてもらいたい。これはすべての民族が実行しているもので、ユダの人々も、エルサレムに残留している者たちも行っているのだ。そうすれば、あなたや御子息たちは王の友人と認められ、金銀、その他多くの報奨を受ける米誉にあずかるであらう。」

19 マタティアは大声でこれに答えて言った。「たとえ王の領土内に住む全民族が王に従い、各自その先祖の宗教を捨てて王の命令に服したとしても、20 このわたしと息子たち、同胞たちはわたしたちの先祖の契約を守つて歩みます。21 律法と掟を捨てるなど、論外です。22 わたしたちの宗教を離れて右や左に行けという王の命令に、従うつもりはありません。」

23 マタティアが語り終えたとき、一人のユダヤ人が一同の前に進み出て、王の命令に従いモデインの異教の祭壇にいけにえを献げようとした。24 これを見たマタティアは律法への情熱にかられて立腹し、義憤を覚え、駆け寄りざまその祭壇の前でこの男を切り殺した。25 またその時、い

けにえを強要しに来ていた王の役人の一人をも殺し、この祭壇を引き倒した。26 それは、あのサルの子ジムリに対してピネハスがしたような、律法への情熱から出た行為であつた。27 マタティアは町の中で大声をあげて言った。「律法に情熱を燃やす者、契約を固く守る者はわたしに続け。」28 こうしてマタティアと息子たちは、家財一切を町に残したまま、山に逃れた。

29・30 一方、これと時を同じくして、義と公正を求める多くの者が、妻子や家畜を伴つて、荒れ野に下り、そこに住んだ。災いが迫つて来たからである。

福音 (ルカ19章41―44節)

41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまふだらう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

朗読から祈りへ

―掟を守る熱意―

エルサレムから20キロほど離れた田舎町モデインに住んでいた祭司マタティア。彼はその町では「有力な指導者であり」、人望もあつた。その彼に王アンティオコスが派遣した役人が王の命令に従うように説得した。マタティアはこれに反発する。「律法と掟を捨てるなど、論外です。わたしたちの宗教を離れて右や左に行けという王の命令に、従うつもりはありません」。

律法や掟は「道しるべ」のように思える。神への道。幸せへの道。自己完結への道。平和への道。神が与えた律法や掟はその道の途上にある「道しるべ」のよう。その「道しるべ」に従って生きる時、救いへの道を歩むことになる。

今の世界、神が示した律法や掟を軽視しているのではないかと思うことがある。すべての律法は愛に基づいているというイエスの教えを知っているがゆえに、こころのどこかで法や掟を軽んじているのではないかと感じる。真剣

に掟を守って生きようとする人を、まるで律法主義者のように決めつけているのではないか。私自身、そのように感じることもある。そして、その裏には掟を軽視する気持ちがある。そんなに真剣に掟を守る必要はない。愛のこころでまじめに生きていけばいい、と。

殉教者のことを思う。なにも命まで捨てることはないのではないかと、と正直思ってしまう。今、命を懸けてまで、神の道を歩もうとする気持ちが薄いのではないだろうか。

―平和への道―

熱意はときとして争いと破壊をもたらす。日本では争いと破壊の遺跡をあまり見ることとはできないが、石の文化といわれている西洋では破壊の歴史の跡が今でも多く残っている。石でできた要塞や城壁、華麗な神殿や権威と支配と栄光の残骸を見ることが出来る。壊しては建て、壊しては建てた跡を見ることが出来る。政治の世界でも、宗教の世界でも、争いと栄光が繰り返され、現代までとどまるところを知らない。神の平和と呼ばれる町エルサレム。このエルサレムが今、イエスに敵対するものとして示される。律法を完全に守ろうとする

ファリサイ派の人々。彼らは熱意のあまり、まことの平和の道を示したイエスを理解することができず、敵対する。その熱意がイエスを十字架で殺すことになる。平和の町、エルサレムで。もし彼らが「平和への道」「神が訪れてくださる時」をわきまえていたなら、そのようなことにはならなかっただろう。

法を守る熱意があることはいい。ただ、それは神の法であつて、人が定めた間違つた法ではない。神のみ旨なのか、人の単なる望みなのか、はては悪意に満ちた法なのか、それを見極めなければならぬ。ファリサイ派の人々は熱心さのあまり、神の思いを悟ることができず、自分中心に自己満足求めて法を守っていた。その間違いをイエスは指摘する。そのイエスの思いが伝わらない。イエスは泣く。

イエスに従う多くの人がそのために血を流した。破壊された遺跡には血の跡が見える。その跡に築かれた平和もまた崩され、血の跡が残る。繰り返される争いと破壊。イエスがその血を流して示した平和への道。小さな愛の行いを通して過去の血を拭い、平和を「地道に」築いていかねばならない。「血道に」ではなく。

(M・M・Y)